

現代女性詩人 イバン・ポーランド (1944-) と

アドリエヌ・リッチ (1929-) の作品から

富岡 明 美

I

「標準的な男の標準的な性交が、既に、略奪の一形態——女を植民地化する、力づくの（即ち男らしい）ほとんど暴力的である形態」¹⁾であり、「性行為は本質的に、女を男の所有物にするようしつらえられている」²⁾という、1987年のアンドレア・ドワーキンによる本質論的展開は、「フェミニズムもここまで来たか」という実感を与えた。しかし、「父権制があらゆる社会の中でどれほど基本的な形態であるか」³⁾という、20年前のケイト・ミレットの言説が、今日もお裏付けされていく中で、男が女を、そして自分自身をも解放したがる根拠は、その「性」の政治学にあるのではないだろうか。男と女の「性」の力学は、正に、男と女のあらゆる関係の象徴になっているのだ。

性は「自然」なものであり、男女の性器の差違とか、男が女に侵入するという行為も、生物学的に已むを得ないことであり、問題は性行為そのものではなく、それがもたらす政治的なのだと思ってきた女性も多いであろう。其れ故、あくまでもその「自然」な、男との性関係の境域で、女は自分のセクシュアリティを探究してきたのである。しかし、「性」の力学それ自体に、女が男に抑圧されてきた本源があるなら、我々はその力学を暴露し、解体していかねばならない。

本稿で論ずる Eavan Boland と Adrienne Rich は、正に、この「性」の政治学が女を心理的、肉体的に傷つけ、破壊しているかを詩に綴り、女の側から「性」の神話の解体を試みる。同時にそれは、ポーランドの場合、「性」の政治学を基盤とする、キリスト教文明全体に対する反抗抗議にもなっているし、

リッチの場合は、レズビアン・フェミニズムを、神話解体後の唯一の倫理的人間関係として、再構築させる試みでもある。

II

イバン・ポーランドの詩について言及する前に、彼女の紹介を少ししておこう。彼女は男性文豪たち⁴⁾の伝統が今なお圧倒的に強く残存するアイルランドのダブリンで詩作活動をするフェミニストである。彼女は良質な古風さの中に意外性を持ち合わせた優れた詩人であるのに、日本での彼女の存在はほとんど皆無であり、⁵⁾日本のアイルランド文学の研究者の心「理」は、女性のしかも詩人がアイルランドに存在することすら想像できないのではないかと疑いたくなる。第二のイエイツの到来が渴望されている現在、それを女性詩人の姿に見い出そうとする者はいない。イエイツが愛した女性（彼が女性を愛せたかは疑問だが）については多くの興味が注がれている⁶⁾のに、生身の女性文学者に関心を寄せる者はいないのである。それはまず、後述のアドリエヌ・リッチのように、彼女が敢えて女の日常空間を題材にしたからであろう——「なにしろ詩は“普遍的”たるべし、だからもちろん非女性的でなければならぬ」⁷⁾という掟を破って。これはアイルランド人論や民族自決主義を探究する文学的土壌の中では、困難な試みであったであろう。しかも離婚や中絶が今だに合法化されていない保守系カトリックの国では、一層至難の業である。何故ならそこでは観念化された女性原理や女性の役割に疑問を投げ掛けることは許されていないのだから。しかしポーランドは、今まで詩の題材に成り得なかった、女の日常生活を敢えて詩に表出し、今まで文学の、特に詩という領域の周縁に追いやられていた沈黙を声にし、それ

を人間正典ヒューマン・キャンノンに戻したいと訴える。⁸⁾ おきまりの、おもしろ味のない日常生活は、女の体験というよりは人間の体験であり、彼女の使命は、知覚体験を女性化 feminize するのではなく、女性性 femininity を人間化 humanize することにあると信ずる。⁹⁾ 彼女の急進主義は、詩の複雑な機構を、不明瞭で捕らえにくい人間の体験にいかにか近づけるかにあり、¹⁰⁾ 彼女にとって詩の美学とは、真実なしには存在し得ないのである。¹¹⁾

1980年に *Contemporary Irish Poetry* という名詩選アンソロジーの初版が出版され、その中に編纂された43名の詩人のうち女性が2名、1987年の改訂版では49名のうち女性は5名選ばれたが、ポーランドはそのどちらにも含まれている。しかし1967年に最初の詩集 *New Territory*¹²⁾ を出してから、漸く認められるようになるまで20年近くもかかっており、それは彼女が *The War Horse* (1975) 以後、出版社を Arlen House (フェミニスト出版社) にしたため、文学界の主流から外され忘れ去られていた20年であったともいえる。

良質な古風さと絵画性と知性ヒューマニズムを持ち合わせたポーランドは、前述のように人道主義を提唱するが、しかし奇しくも彼女が真に憤り、真にフェミニストの顔を見せた時、その時彼女の詩人生命は溢れるように流れ、彼女の詩作は頂点に達するように思われる。その彼女のフェミニストの声を集めた詩集に *In Her Own Image* (1980) 『彼女自身の姿イメージに』があるが、それは神が in his own image 彼自身の姿イメージ にアダム(男)を創造したことから発する、西洋文明の根源となって

ANOREXIC

Flesh is heretic.
My body is a witch.
I am burning it.

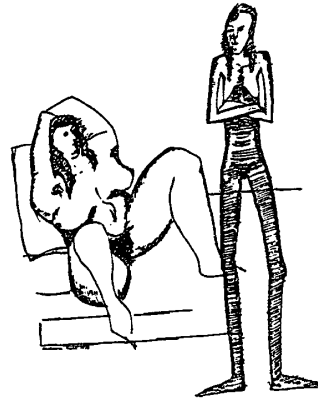
Yes I am torching
her curves and paps and wiles.
They scorch in my self denials.

How she meshed my head
in the half-truths
of her fevers

till I renounced
milk and honey
and the taste of lunch.

いる家父長制イデオロギーへの背反である。この詩集には“Mastectomy”「乳房切除」「Solitary」「孤独」「Menses」「月経」「Witching」「魔女」「Exhibitionist」「露出症」「Making-up」「化粧」などが収められているが、ポーランドは、女性像がいかにか男によって作られ、いかにか男の欲求に適うように作られているか、そしてその犠牲となった女の病的有様を、女の裸体画と共に詩に綴る。このモノクロの裸体画は、ポルノグラフィのように「見られる」客体として情欲をそそることもなく、痛いまでに女の病的様相を描き出す。

この詩集の中でも一際異彩を放っているのは“Anorexic”「食欲減退」で、ポーランドはこの女の病的空間を意表を突く巧妙さで描写し、インターコース「性」の政治学にパラノイア的怨念を燃やす。



食欲減退

肉は異教。
私の身体は魔女。
私はそれを燃やす。

ええ私は松明の炎で焼いているの
彼女のふくらみや乳首や企みを。
それらは私の自己否定の中で焦げる。

彼女はなんと酷い畏に
私の頭を掛けたことか
彼女の熱の半面の真理の中に

私がミルクと蜂蜜
そして昼食の味を
断念するまで。

I vomited
her hungers.
Now the bitch is burning.

私は彼女の飢えを
吐き出す。
今あばずれ女が燃えている。

I am starved and curveless.
I am skin and bone.
She has learned her lesson.

私は餓死寸前でふくらみもない。
皮と骨だけ。
彼女はこれで解っただろう。

Thin as a rib
I turn in sleep.
My dreams probe

肋骨のように細くなって
私は眠りに入る。
私の夢は探る

a claustrophobia
a sensuous enclosure.
How warm it was and wide

閉所恐怖症を
官能的な囲いを。
そこは何て温かくそして広がったのだろう

once by a warm drum,
once by the song of his breath
and in his sleeping side.

かつて温かい太鼓の様な音の傍らで、
かつて歌の様な彼の息遣いの傍らで
そして彼の眠っている横腹の中で。

Only a little more,
only a few more days
sinless, foodless,

もうほんの少しだけで
もうほんの二三日で
罪もなく、食べ物もなく、

I will slip
back into him again
as if I had never been away.

私は再び
彼の中にこっそり戻ろう
まるで今まで一度も不在でなかったかの様に。

Caged so
I will grow
angular and holy

この様に檻に入れられ
私はなるであろう
痩せこけ神聖に

past pain,
keeping his heart
such company

痛みも感じず
彼の心臓を
友とすれば

as will make me forget
in a small space
the fall

私に忘れさせてくれるだろう
小さな空間の中で
墮落を

into forked dark,
into python needs
heaving to hips and breasts
and lips and heat
and sweat and fat and greed.

二股の暗闇の中へ、
大蛇の要求の中へ
腰や胸や唇や熱や
汗や脂肪や貧欲の上に
吐く様に喘ぎながら。

(富岡試訳)¹³⁾

まずこの詩は、神話化された女性原理の具象であるイブ=魔女を話し手とする、^{インターコース}性^にに表徴された家父長制イデオロギーの源である、キリスト教文化への抗議となっている。詩の出発点“Flesh is heretic”「肉は異教」は、正しくキリスト教の霊肉二元論——精神(男)の肉体(女)に対する優越性——を示唆し、そのイデオロギーの中に閉じ込められた女の病的空間を恐ろしいまでに見せつける。確かにヨーロッパ文化は、この肉・性欲を人間の苦悩の根源と見なし、その責任を女に負わせる神話を二つ作り上げたが(ギリシャ神話の「パンドラの箱」と聖書の「失樂園」の物語)、「どちらの場合にも、女の魔性についての原始的なマナ概念が、最終的な文学化の段階を経て、今日あるようなひじょうに影響力の強い倫理的正当化になった」¹⁴⁾のだ。しかし聖書には本来、^{マンガインド}人類の創造について二つの物語が存在する。一つは「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女に創造された」(『創世記』1章27節)と、もう一つは、男が最初に造られ、彼が孤独であったので、神は男のあばら骨の一つを取って女を造った(『創世記』2章21~24節)とするものである。第一の物語には平等性があるが、しかし、「これが、ユダヤ教・キリスト教の法律体系の中に影響を及ぼすことはなかった。今日、聖書を市民権的・社会的道徳の根源としている世俗法の体系の中にも、これがモデルとして取り入れられた形跡は、全く見当たらない」¹⁵⁾という。一方女を明らかに男の劣等に位置づけ、男の所有物・付属物に貶めた第二の物語は、今日のジェンダー・イデオロギーの中核として残存している。そして新約聖書にはこの支配関係を正当化すべく、つぎのように記されている——「なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たからである。また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのである」(『コリント人への第一の手紙』11章8~9節)。女の客体化、女のモノ化、女の隷属化をこれ以上明らかに表現し得ようか。

さてポーランドは、この内面化されてしまった隷属空間の中で、女はいかにその病^{ウイルス}原体に犯されながら病的に生きるかを描出する。まずイブ(女)の墮罪が許され救われるためには、肉を、男を罪に陥れるエロスを否定しなければならない。“My body is a witch. / I am burning it.”とは正しくこの女のセクシュアリティの否定である。ヨーロッパで、400年にも渡って、900万人もの女たちが魔女裁判にかけられ火炙りにされたという事実は、この女の性欲に対する男の恐怖と嫌悪か

ら出るものであろう。「数えきれないほど多くの女たちが、男が夜眠っている時に男を訪れ、男とセックスをし、男に射精させたという罪をかぶせられた」¹⁶⁾という。しかしセクシュアリティの否定は“self denials”自我をも否定することになり、これは「自我に目ざめた魔女の意識」¹⁷⁾を抹殺することを意味する。男はこの自我無しの女性の性を所有することにエクスタシーを覚え、女は「己の無力さと自己消滅を官能化している」¹⁸⁾のである。

この肉を、自我を、消滅させるために、女は自己にムチ打ち食欲を減退させる、所謂現代病の一つである拒食症になるという、非常に病的な方法をとる。自我消滅はセクシュアリティを否定するだけにとどまらず、女は見られる客体として、男の作り上げた美の呪縛の中で忘我するのである。

さて魔女の身体で表徴されている肉、自我を焼き消した後、詩は意表を突くような展開となる。イブ(女)は再びアダムのの中に、彼女自身が造られたその男の身体の中に、こっそり戻るといっているのである。この空間は、「閉所恐怖症」と表現されているように病的である。患者にとっては恐怖の囲いも、同時に官能的で平和な、守られた場所になっているのだ。この^{アンビバレンス}反対感情両立は、家父長制が女を無力・無能力化し続けてきた産物であり、女性心理の深遠に根強く潜在する「依存願望」、「他者に面倒をみてもらいたいという根強い願望」、所謂コレット・ダウリングが名づけるシンデレラ・コンプレックス¹⁹⁾である。

しかし詩の最後で、ポーランドは再度意外な展開で我々を驚愕させるのである。否定しなければならなかった肉を、^{インターコース}性^とと性器の^{イメージ}描写 (“into forked dark” 女, “into python needs” 男)を通して全面的に蘇らせ、シルヴィア・プラスのように、女は、男が恐怖する魔女に再び変身をし、自らが蛇に対象化される男根となって、男を“heaving” 性行為へと誘惑する。家父長制の下で男が蓄えてきた脂肪や貪欲さを嘲笑い、自分自身の中で否定せねばならなかったセクシュアリティを蘇らせ、この男性優位の全文明にたいして、抑圧されてきた感情を、狂気にも似た怒りと共に、性の行為の中へ吐き出す (heave = vomit) のである。ポーランドは最後に3行から5行に増行し^{リズム}律動を変え、最後の3行

[i:] [i] [e]
heaving to hips and breasts

[i] [i:]
and lips and heat

[e] [æ] [i:]
and sweat and fat and greed.

の見事な母音押韻で、一気に男根主義文明の批判を、
パラノイア的怨念を持って遣って退けるのである。

III

アドリエンヌ・リッチは男との^{インターコース}性^の政治学を
「男根中心主義的なサディズムと、目にも明らかな女性
増悪」²⁰⁾と看破し、父権制の創造的エネルギーが尽
きかけ、それが自ら発生させる破壊エネルギーを洞察
する。²¹⁾ 異性愛^{ヘテロセクシュアル}——結婚もし三人の子育ての経
験もある——から、結婚という制度がもたらす異性
愛関係の悪、そして男の中に本質的に内在する邪悪と
陰性を見、人道主義、両性具有主義を捨て (“Natural
Resources” (1977) 「天然資源」)、レズビアン・フェ
ミニズムの世界²²⁾に唯一の倫理的人間関係としての
「新しい空間」を再構築しようと試みる。²³⁾

まずリッチが男との性行為をどのように描出してい
るのか。詩集 *Leaflets* 『散らし』の “Nightbreak”
(1968) 「夜の到来」の後半が良い例であろう。

In the bed the pieces fly together
and the rifts fill or else
my body is a list of wounds
symmetrically placed
a village
blown open by planes
that did not finish the job
The enemy has withdrawn
between raids become invisible
there are
no agencies
of relief
the darkness becomes utter
Sleep cracked and flaking
sifts over the shaken target

What breaks is night
not day The white
scar splitting
over the east
The crack weeping
Time for the pieces

to move
dumbly back
toward each other.

ベッドでは破片が一緒に飛び交う
そして裂け目が大きくなる これ以外はない
私の身体は 対称的に配置された
傷の一覧表
爆撃機で 爆破され焼け野原になった
村
爆撃は終わってはいない
敵は撤退した
襲撃の間に 見えなくなっている
救援の
ようすは
ない
真っ暗闇になる
砕かれた眠りが 破片になって舞い散り
震える標的に 降り込む

砕けるのは 夜
昼ではない 白い傷跡が
東の方で
裂ける
裂け目が涙を流す
破片が
戻る時だ
無言で
お互いに対つて。

具体的にどの心像が^{イメージ}性交^{インターコース}の描写なのか問題として
残るとしても、この男女のベッドは戦場であり、セッ
クスは女にとって破壊的なものとなる。リッチにとっ
てセックスに内在する男の暴力は、正にベトナム戦争
などを引き起こす男の残忍性の源となっている——

爆撃を例にとるなら、もしそこから私たちが教え
られることがあるとしたら、制度、階級、人種的抑
圧、ペンタゴンの傲慢、右翼の行政の冷酷無情な
どよりももっと身近なもの、もっと私的で苦痛をも
たらすとともに、もっと一般的で風土的なものの光
にあてて、爆弾は理解されなくてはいけない。爆撃
がこれほど全面的にサディスティックで、いわれの
ない、悪魔的なものである以上、もし私たちがしっ
かり目をすえる気があれば、究極的にはそれが何を

あらわしているかが見えてくるはずだ。つまり、具体的な性的暴力行為の代用品であり、男の心理において性と暴力が一致していることの表現なのだ。²⁴⁾

リッチは続ける ——

強姦は戦争につきものだ。しかしもっと正確には、相手を非人格化しようとする、男の^{セクシュアリティ}性^{エトス}をこれほどむしばんでいる能力が、セックスから戦争にもちこまれたのだと言うほうがいいかもしれない。²⁵⁾

この男の、自らをも破片化してしまう破壊的エネルギーの中で、リッチは女と女の愛の関係を、唯一の倫理的人間関係と見做し、女の愛の世界を創造する。そこにはもはや破壊的な他者の客体化は存在しない。それは「新しい詩」の始まりなのだ。

two women, eye to eye
measuring each other's spirit, each other's
limitless desire,
a whole poetry beginning here.
"Transcendental Etude" (1977)
The Dream of a Common Language

二人の女が、お互い見つめ合う
お互いの心、お互いの無限の欲望を
はかりながら、
一つの全く新しい詩がここで始まる。
「超越的エチュード」(1977)
『一つの共通言語への夢』

この「全く新しい詩」は長篇詩“Twenty-One Love Poems” (1974-1976)「二十一の愛の詩」の中に具象化されている。セクション(I)の男の暴力とサディズムが築き上げたポスト・モダンの不毛の荒れ地と、セクション(II)の女の平和な愛の関係との対比は印象深い。

I

Wherever in this city, screens flicker
with pornography, with science-fiction vampires,
victimized hirelings bending to the lash,
we also have to walk . . . if simply as we walk
through the rainsoaked garbage, the tabloid cruelties

of our own neighborhoods.

この都会の至る所で、スクリーンはちらちら明滅する

ポルノグラフィで、空想科学小説の吸血鬼で、犠牲になった労働者はムチ打たれる、私たちも歩かねばならない……たとえ単に歩くだけに過ぎなくとも

雨にずぶ濡れになった^{ごみ}廃物を通り抜け、私たちの近所で起きた

残忍な行為の載ったタブロイド版の新聞の^{ごみ}廃物を通り抜けて。

II

I wake up in your bed. I know I have been dreaming.

Much earlier, the alarm broke us from each other,
you've been at your desk for hours. I know what I dreamed:

our friend the poet comes into my room
where I've been writing for days,
drafts, carbons, poems are scattered everywhere,
and I want to show her one poem
which is the poem of life. But I hesitate,
and wake. You've kissed my hair
to wake me. *I dreamed you were a poem,*
I say, *a poem I wanted to show someone . . .*
and I laugh and fall dreaming again
of the desire to show you to everyone I love,
to move openly together
in the pull of gravity, which is not simple,
which carries the feathered grass a long way down
the upbreathing air.

私はあなたのベッドで目を覚ます。夢を見ていたのを知っている。

もっと前に、目覚し時計のせいで私たちはお互いから離れた、

あなたはもう何時間も机に向かっている。私は何を夢見たか知っている：

私たちの友人で詩人が私の部屋に入って来る
そこで私はもう何日も書きものをしていただけけれど、
原稿や、カーボンや、詩がそこら中にちらばっている、

そして私は彼女に一つの詩を見せたい
それは私の人生の詩。でも躊躇して、
そして目が覚める。あなたが私の髪にキスをして
私は目を覚ます。あなたが詩だという夢を見た、
と私が言う、だれかに見せたかった一つの詩…
そして私は笑って再び夢を見る
私が愛するすべての人にあなたを見せたい願望の
夢、
一緒に自由に動く願望
簡単ではないけれど、引力に引っぱられながら、
その引力は羽のついた草をずっと下に運ぶ吹き上がる
大気の中を。

愛する女のベッドの中で夢見心地に目覚める時ほど、
平和で幸せな瞬間はないであろう。都会はポルノ
グラフィックや残酷な犯罪で眠ることも知らないのに、
女は「夜の到来」で描写されていたように男の暴力で
眠りを妨げられることもなく、深い太古の眠りから目
覚める。女たちは破片でも断片でもなく全人的人間で
あり、女にとって愛する女は「新しい詩」そのもので
あり、彼女の生命である。この愛の關係に都会の騒
音は聞こえてこない。(I)の機関銃のようなリズム
と、身体を突き刺すような音も、彼女らの日常会話の
優しさに消されてしまっている。都会の傷々しい原色
も、彼女らの愛の淡い色の中に溶けその姿はない。こ
こはまるで夢のようで、羽毛のように柔らかく、宇宙
のように軽い。そしてリッチは最後の二行で撞着語法
(oxymoron)を使っているが——“in the pull of
gravity” (↓) “the feathered grass” (↑) “a long
way down” (↓) “the upbreathing air” (↑)——そ
れは彼らの経験が異性愛主義社会では「異常」
視され、その矛盾を表わす技法^{テクニカル}的效果にもなっ
ているし、²⁶⁾彼女らが直面する苦悩や至難をも感じさせ
る。しかしリッチはこの技法^{テクニカル}を用いて、家父長制
の礎になっている主体/客体、上/下の力学を、根底
から覆そうと試みているのではないだろうか。この
技法^{テクニカル}は他の箇所にも現れるが、女たちの愛への旅
立ちには正にこの力学を拒絶することから始まる。

XI

Every peak is a crater. This is the law of volca-
noes,
making them eternally and visibly female.
No height without depth, without a burning core,
though our straw soles shred on the hardened lava.

I want to travel with you to every sacred mountain

どんな頂上もクレーター。これは火山の法則、
火山を永遠にそして明らかに女にする。
深さを持たない高さはないし、燃える核を持たない
高さもない、
固まった溶岩で私たちの藁の靴底がぼろぼろになっ
ても。
あなたと一緒にあらゆる聖なる山へ旅がしたい

そして女たちは決して他者を客体化、同一化させる
ことなく、他者は他者のままで愛するのである。女は
宇宙の太古の声を共有し一体となるが、

But we have different voices, even in sleep,
and our bodies, so alike, are yet so different
and the past echoing through our bloodstreams
is freighted with different language, different mean-
ings —
though in any chronicle of the world we share
it could be written with new meaning
we were two lovers of one gender,
we were two women of one generation. (XII)

でも私たちは眠りの中でさえ、異なった声を持ち、
そして私たちの身体は、こんなに似ているのに、こ
んなにも異なる

そして私たちの血管にこだまし流れる過去は
別の言語、別の意味をのせて運ぶ——
たとえ私たちが共有するどんな世界の年代記に書か
れるとしても

そこには新しい意味が記されるであろう
私たちは一つの性を持つ二人の恋人、
私たちは一つの世代に生きる二人の女。

彼女らの性的關係も、搾取的でも破壊的でもなく、
あくまで優しく繊細で、自然と同化するものである。
それは既成の男との愛の形には当てはまらなく、女が
自分のセクシュアリティを知る自由の中で営まれる。
其れ故、このセクションには番号が付いておらず
浮遊しているのである。

(THE FLOATING POEM, UNNUMBERED)

Whatever happens with us, your body
will haunt mine — tender, delicate

you lovemaking, like the half-curved frond
of the fiddlehead fern in forests
just washed by sun. Your traveled, generous thighs
between which my whole face has come and come —
the innocence and wisdom of the place my tongue
has found there —

the live, insatiate dance of your nipples in my
mouth —

your touch on me, firm, protective, searching
me out, your strong tongue and slender fingers
reaching where I had been waiting years for you
in my rose-wet cave — whatever happens, this is.

(浮遊している詩, 番号ナシ)

私たちに何が起きようと, あなたの身体は
私の身体に付き纏うだろう — 柔らかく, 繊細で
あなたの愛の営みは, ちょうど太陽の光を浴びた
森の渦巻き首をもつしだの
半巻きした葉のよう。あなたの彷徨う, 寛容な腿
その間を私の顔のすべてが何度も訪れた —
その場所の無垢と知恵を 私の舌はそこで見つけ
た —

私の口の中にある生き生きして飽くことのないあな
たの乳首のダンス —

私の上をあなたが触れる, しっかりと, 守ってくれ
て,

私を捜し求めながら, あなたの強い舌と細長い指は
何年もあなたを待っていた場所に伸びる

私のバラ色で濡れた洞窟の中へ — 何が起ころう
と, これがそうなのだ。

しかし女と女の愛とて終焉を迎えうる。女と女の関
係とて他者との関係でしかあり得ないからだ。だから
リッチも

*the more I live the more I think
two people together is a miracle.* (XVIII)

長く生きれば生きるほど私は思う
二人の人間が一緒だということは奇跡であると。

two women together is a work
nothing in civilization has made simple,
two people together is a work
heroic in its ordinariness, (XIX)

二人の女性が一緒だというのは努力のいる仕事
文明がこれ以上純然たるものにしたことはない,
二人の人間が一緒だというのは努力のいる仕事
その日常性の中の英雄的な部分,

と述べている。しかし女たちの愛の崩壊は, 家父長制
が産出したジェンダー・イデオロギーに基づく力学の
結果ではないのである。其れ故リッチは, 女と女の愛
に尚も希望の光を見出し, その中に独立した自我と
自我の関係を求める。そしてリッチは, 人類の有史前
の太古の前意識を再び呼び起こし, 「光の裂け目」に
照らし出されながら, 靈感の底暗い神聖さの中で, 巫
女として, 処女として, 円で象徴された女の性器を描
きながら, 女の愛を賛美する儀式を行い, この長篇
詩を終えるのである。

XXI

The dark lintels, the blue and foreign stones
of the great round rippled by stone implements
of the midsummer night light rising from beneath
the horizon — when I said “a cleft of light”
I meant this. And this is not Stonehenge
simply nor any place but the mind
casting back to where her solitude,
shared, could be chosen without loneliness,
not easily nor without pains to stake out
the circle, the heavy shadows, the great light.
I choose to be a figure in that light,
half-blotted by darkness, something moving
across that space, the color of stone
greeting the moon, yet more than stone:
a woman. I choose to walk here. And to draw this
circle.

暗いまぐさ石, 石の道具でさざ波模様をつけられた
大きな円をつくる 青くて見知らぬ石
真夏の夜の月光が地平線の下から上ってくる
— 私が「光の裂け目」と言った時
このことを意味した。これは単にストーンヘンジで
もなく
あるいはどんな場所でもない それは
共有する孤独を,
寂しさなしに選ぶことができるような場所へ戻る
精神なのだ,
容易くもなければ 苦しみもないわけではないが

くい棒で

円を、重い影を、偉大な光を描くために。
私はその光の中の人影になることを選ぶ、
暗闇で半分覆い隠されて、その空間を横切って動い
ている何か、月を迎える
石の色、しかし石以上のものに：
一人の女。わたしはここを歩くことを選ぶ。そして
この円を描くことを。

IV

ポーヴォワールが晩年、「老い」について網羅的に
論述した時、老年の悲劇は、もともといかなる
生存理由をも与えない資本主義体制のシステムに起因
しているのだから、人はもはや「現状より少し気前の
よい『老年対策』」²⁷⁾などで満足せず、「人生を変える
こと、以外にはない」²⁸⁾と喝破した。同様に、もし仮
に女性を取り巻く環境が少し改善された（されるかも
知れない）からといって、満足はしてられないので
はないか。^{インターコース}性の政治自体を変える以外にはない
のだ。

将来、女性のセクシュアリティを追及すると同時
に、この性交そのものにも益々着眼していかなければ
ならないであろう。そして、試行錯誤の中で、様々な
試みがなされなくてはならない。

注

- 1) Andrea Dworkin, *Intercourse* (New York: Macmillan, 1987). 寺沢みづほ訳、『インターコース 性的行為の政治学』（青土社、1989）、p. 140.
- 2) 同上。
- 3) Kate Millet, *Sexual Politics* (New York: Doubleday and Company Inc., 1970). 藤枝濤子他共訳、『性の政治学』（ドメス出版、1985）、p. 88.
- 4) Jonathan Swift, Oliver Goldsmith, Oscar Wilde, George Bernard Shaw, James Joyce, John Millington Synge, William Butler Yeats, Samuel Beckett, Brendon Behan, Flann O'Brien, Sean O'Brien, Sean O'Casey, Patrick Kavanagh, Seamus Heaney などすべて男性である。
- 5) 1988年8月にアイルランドでポーランドに出逢い、彼女の人柄と作品に触発されて研究を始め

る。次の論文を参照されたい。

- 富岡明美、「Eavan Boland の女」（『日本イエイツ協会会報』、第21号、イエイツ没後50年記念号、1990年発行予定）。
- 6) 例えば、大浦幸男、『イエイツをめぐる女性たち』（山口書店、1987）など。
 - 7) Adrienne Rich, *On Lies, Secrets, and Silence: Selected Prose 1966-1978* (New York: W. W. Norton and Company, Inc., 1979). 大島かおり訳、『嘘、秘密、沈黙 1966-1978』（晶文社、1989）、p. 71.
 - 8) Deborah Tall, "Q. & A. with Eavan Boland," *The Irish Literary Supplement*, Vol. 7, No. 2, Fall, 1988.
 - 9) Eavan Boland, "The Woman Poet: Her Dilemma," *American Poetry Review*, 1987, 32-39.
 - 10) Amy Klauke, "An Interview with Eavan Boland," *Northwest Review*, 1987.
 - 11) Eavan Boland, "The Woman Poet in a National Tradition," *Studies*, Summer, 1987.
 - 12) 彼女の現在までの作品集は、*New Territory* (1967), *The War Horse* (1975), *In Her Own Image* (1980), *Night Feed* (1982), *The Journey and Other Poems* (1986), そして *Selected Poems* (1989) である。
 - 13) 本稿で扱っている詩の翻訳は、後述のリッチの詩も含めて、すべて富岡試訳によるものである。
 - 14) ケイト・ミレット、p. 112.
 - 15) アンドレア・ドゥァーキン、p. 275.
 - 16) 同上、p. 117.
 - 17) 水田宗子、『ヒロインからヒーローへ：女性の自我と表現』（田畑書店、1982）、p. 210に「高橋たか子は、女性には母性の女と魔性の女がいるのではなくて自我に目覚めた女と目覚めない女がいるだけだといったが、自我とはまさに魔女の意識であるといってもよい」とある。
 - 18) ドゥァーキン、p. 238.
 - 19) Colette Dowling, *The Cinderella Complex: Woman's Hidden Fear of Independence* (New York: Pocket Books, 1981). 柳瀬尚紀訳、『シンデレラ コンプレックス』（三笠書房、1986）、p. 32.
 - 20) リッチ、「わたしたち死者が目ざめるとき」（1971）『嘘、秘密、沈黙』、p. 82.

- 21) 同上。
- 22) 富岡明美,「現代アメリカ女性詩人 その(1) —— アドリエンヌ・リッチ (1929-) とレズビアン・フェミニズムの世界」(『英学』, 第22号, 平安女学院短期大学英学会, 1990年, 3月, 25-44)を参照されたい。ここではレズビアンとは何か, リッチの提唱するレズビアン・フェミニズムとは何かを言及し, リッチの1978年の詩集『一つの共通言語への夢』の中の「21の愛の詩」を中心に, レズビアンの世界を探ってみた。
- 23) Janice Markey, *A New Tradition? The Poetry of Sylvia Plath, Anne Sexton and Adrienne Rich: A Study of Feminism and Poetry* (Frankfurt am Main: Verlag Peter Lang GmbH, 1988)では, リッチがどのように異性愛から両性具有という観念を経てレズビアン・フェミニストになって行くのかを, 彼女の詩を中心に論考している。
- 24) リッチ,「^{カリアテイド}女像柱 —— 二つのコラム」(1973), 『嘘, 秘密, 沈黙』, pp. 185-186。
- 25) 同上, p. 196。
- 26) Adrian Oktenberg, "Disloyal to Civilization: The Twenty-One Love Poems of Adrienne Rich," in *Reading Adrienne Rich: Reviews and Revisions, 1951-1981*, ed. Jane Boberta Cooper (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1984), p. 77.
- 27) Simone de Beauvoir, *La Vieillesse* (Éditions Gallimard, 1970). 朝吹三吉訳, 『老い』(人文書院, 1972), p. 640。

本稿は, 日本女性学会1990年6月大会(於横浜女性フォーラム)における, 口頭発表に基づくものである。